

地域における発達支援のありかた その1

和田 薫 橘 実千代 富井 あゆみ 栗山 志津子
 聖和大学 児童相談研究所

【目 的】

「今後の特別支援の在り方について（最終報告）」（2003年＊1）では、「障害の程度に応じ特別な場で行う『特殊教育』から障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う『特別支援教育』への転機を図る」と基本的視点が述べられている。発達に問題をもつ子どもの早期発見、早期療育が提唱されてから久しくなる。その間、医療技術は目覚ましい発展を遂げているものの、現実の子どもや親への支援は各機関がそれぞれの方針で援助を行っており、その形態はさまざまである。そのため、親は子どもにとってよりよい場探しを重ねるケースが多いのも事実である。当児童相談研究所（以下当所と記す）も、就園前の支援場所としての役割を求められることが多くなり、発達支援の傾向が変わりつつある。

本発表では、この変革期に、地域の関係機関との密接な連携と協力のもと行っている乳幼児期の子どもの発達支援の一つとして、当所が企画、実施した「せいわクラブ（親子リズム教室）」（以下せいわクラブと記す）について、そのあり方を検討・考察し、地域における発達支援のありかたを提唱していきたい。

【方 法】

当所が位置するN市では、10年ほど前より子どもの療育に携わる機関を中心に、子どもや保護者の支援を行ったり、子どもを預かる各療育機関の保育者の資質向上を図ったりするための研究会（精神運動発達研究会／以下S研究会と記す）を開いている。また近年、これらの機関を中心とした市のネットワークも充実されつつある。その結果、一人の子どもに対して互いの情報を交換し、子どもにとって適切な場所を提供できるようになってきた等が考えられる。しかし、就園前の療育を行う支援場所はまだまだ少なく、親たちはその場を求めている。当所ができることとして、当所の施設や経験・実績をうまく活用するのがよいのではないかと考え、我々が日常行っている、発達に問題をもつ子どものための発達支援クラス（小集団保育・週5日・9:00～11:30／以下F組と記す）の中の「親子リズム」を基にして、地域支援を行うことを起案し、企画・

実践した。

ここでは、F組中で行っている「親子リズム」の基本的な考えと、「せいわクラブ」の開設の経緯を述べ、我々が試みた地域支援のあり方について考察する。

【内 容】

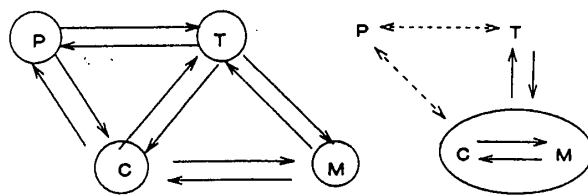
1. 親子リズムについて

（1）基本的考え

F組において、保育プログラムの中で、保護者への指導の一環として行ってきたものである。ある種の聴覚に問題を持つ子ども以外は、年齢が幼ければ幼いほど、音やリズムに極めて敏感であり、リズムカルな歌や、ことばの抑揚をロズさんだり真似たりするものである。時には、からだを動かしながら自己の思いを表現している。このような幼児の持つ表現する力を基に、大人がどの様に関わればその力を伸ばしていけるかを考え、音楽療法やINREALの理論を取り入れながら、25年あまり行ってきた。その主体はあくまでも子どもであり、子どもの活動をサポートしていくのが親であるといった構図で行っている。（図1）その効果は概ね以下の様なものである。

I：直接的な関わり

II：関係への関わり



（図1）

（2）効果

子どもにとって

- ①楽しみながら身体的なイメージを作り、運動機能を高める。
- ②音楽に合わせる、音楽が合わせる、総合関係において、協調性の基礎を養う。
- ③親との身体接触を通し、かかわりの楽しさを知る。
- ④ことばに左右されずに表現が出来る。

親にとって

- ①実際に、子どもと関わる中でその対応方法を学ぶ
- ②共に行う他の親たちと親しくなれる。また我が子だけでなく他の子ども達の姿も分かり、お互いが支援し合える中になる。
- ③子どもの実践の力を具体的に知り、発達の見通しをつけることが出来る。

このような長年にわたる実践をベースに、①子どもへのかかわり方、②発達の視点からの育児方法、を中核に地域支援の一つとしてのせいわクラブを企画した。

2. せいわクラブの開設の経緯

(1) 対象

- ・発達になんらかの問題を抱え、援助の必要としている子どものケースと共に、子どもに問題はなくても、保護者自身が何らかの形で問題を感じているケースや、他の集団でトラブルを起こし、保護者が支援を求めているケース等を対象とした。
- ・対象年齢は、未就園児が参加できるように2歳からとし、就学1年前の5歳は他の集団に所属していると考え、4歳までとした。しかし実際には、継続希望があり、就学前までの参加者が多くいた。

<考察>

- ・集団行動が苦手、指示を聞き逃しやすい等が理由で、既存の教室へ通わせることを躊躇している保護者や就園前の集団の場を求めている保護者が多く、「せいわクラブ」はプレ集団的な役割を果たしていると考え。また、保護者の希望や不安を解決できるものではないかとも考える。
- ・子ども達にとっても、発達の援助を熟知している所員から、個別の援助を受けながら行う体操や運動は、集団で流してしまいがちな既存の体操教室とは違い、多くの援助を受け、子ども達が習得するものも多く、また定員が少ないことも刺激や待ち時間等を配慮するとよいのではないかと考える。

(2) 目標

せいわクラブの目標は以下の通りである。

- ①子どもと一緒に体を動かすことの楽しさを感じる。
- ②子どもの苦手なことにどう対処していったらよいか見つける。
- ③お互いの子どもの成長も喜び合えるようになる。

<考察>

既製の教室とは異なり、子どもの運動能力を高めることに専念するのではなく、身体を動かすことを媒介に

して、子育て支援をすることを第一と考え、その上で、3つの目標を掲げ、個々の発達レベルに合わせた子どもの発達支援を体操やリズム運動を通して行うことを考えた。これらの目標は、保護者に対する目標であるが、このような考えをもって頂きたいという保護者に対する願いでもある。

(3) 募集方法

S研究会の主な機関に募集の協力を依頼した。その結果、各期間での相談結果、集団経験を必要とするケース、親指導を必要とするケースの紹介が多くあった。

(4) 開催数・参加人数

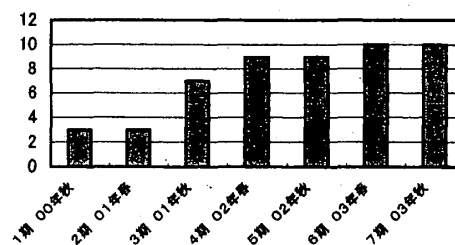


表1

【考察】

- ・当所の働きは、相談業務と療育が主であり、子どもの発達に問題を感じ、来所されるケースを扱ってきた。今回、子どもの発達の問題に拘わらず、「せいわクラブ」の趣旨に賛同した親子を対象としたが、予想した通り、始めの2期は、参加者が5組に満たなかった。現在、待機者ができるだけ希望者が増えており、その原因の一つは継続されるケースが多いこと、もう一つはS研究会の機関からの紹介が多いためである。紹介理由は「親と共に参加できること」「明確な障害は見られないが、なんらかの対応が必要」「気軽に参加できる場所」などがある。回数を重ねるごとに、その存在と役割が認められたことは嬉しく思う。また、このように気軽に参加できる教室の存在が必要とも考える。
- ・対象児の年齢については、未就園児（未満児）を中心に考えていたが、未満児で参加しても就学まで、継続するケースが多く、参加者に年齢の幅が生じた。
- ・2週間に一度、7～8回しか会わないメンバーにもかかわらず、親子とも仲間意識が芽生え、年齢の差や持っている問題の違いを超えて、お互いを認めていくことができるようになったと考える。

*1 2003.3. 文部科学省 特別支援教育の在り方に関する研究協力者会議「今後の特別支援教育のあり方について」